

令和2年度 農作物病害虫発生予察情報 発生予報 第4号（8月予報）

令和2年7月31日 秋田県病害虫防除所

<p>【内容】</p> <p>I. 予報の要点 II. 主要病害虫の向こう1か月の予報 III. 発生予報と防除対策 IV. 気象予報 V. 気象データ VI. 用語の説明</p>	<p>【問合せ先】</p> <table border="0"> <tr> <td>秋田県病害虫防除所</td> <td>018-881-3660</td> </tr> <tr> <td>秋田県農業試験場</td> <td>018-881-3326</td> </tr> <tr> <td>秋田県果樹試験場</td> <td>0182-25-4224</td> </tr> <tr> <td>かづの果樹センター</td> <td>0186-25-3231</td> </tr> <tr> <td>天王分場班</td> <td>018-878-2251</td> </tr> </table>	秋田県病害虫防除所	018-881-3660	秋田県農業試験場	018-881-3326	秋田県果樹試験場	0182-25-4224	かづの果樹センター	0186-25-3231	天王分場班	018-878-2251
秋田県病害虫防除所	018-881-3660										
秋田県農業試験場	018-881-3326										
秋田県果樹試験場	0182-25-4224										
かづの果樹センター	0186-25-3231										
天王分場班	018-878-2251										
<p>【お知らせ】</p> <p>◇今回の予報対象期間は8月を主とします。次回の発表予定は令和2年8月25日です。</p> <p>◇病害虫発生予察情報は秋田県病害虫防除所のホームページで閲覧できます。 https://www.pref.akita.lg.jp/bojo/</p> <p>◇短期暴露評価により使用方法が変更された農薬の情報については、秋田県のホームページで確認してください。https://www.pref.akita.lg.jp/suiden/</p> <p>◇農薬の登録内容は随時更新されますので、防除薬剤については指導機関に相談してください。最新の農薬登録状況の検索や、登録・失効農薬情報は独立行政法人農林水産消費安全技術センターのホームページで閲覧できます。http://www.famic.go.jp/</p> <p>◇病害虫発生予察情報の発表をお知らせするメールマガジンはこちらのホームページで読者登録できます。http://www.e-komachi.jp/</p>											

I. 予報の要点

水 稲	<p>穂いもちの発生量はやや多いと予想されます。ほ場の発病状況を確認し、穂いもち防除を徹底してください。</p> <p>上位葉に病斑が見られるほ場では直ちに薬剤防除を実施してください。また、育苗箱施用剤等を施用していないほ場、中山間地のいもち病常発地帯、葉色が極端に濃いほ場等では今後葉いもちの発生及び穂いもちへの進展が懸念されるため、早めにほ場を確認し薬剤防除を実施してください。</p> <p>葉いもちの発生が認められるほ場では、出穂直前と穂揃期にトライ剤、ラブサイド剤、ビーム剤のいずれかで茎葉散布を行ってください。</p> <p>葉いもちが多発しているほ場では、出穂15～7日前にコラトップ粒剤、ゴウケツ粒剤、サンブラス粒剤のいずれかを散布するか、出穂直前にトライ剤又はビーム剤と穂揃期にトライ剤又はラブサイド剤の茎葉散布に加え、必要に応じて傾穂期にもラブサイド剤による追加防除を行ってください。</p>
大 豆	<p>マメシンクイガの発生量はやや多いと予想されます。連作により密度が高まるので、連作ほ場では次のいずれかで防除してください。</p> <p>①アグロスリン乳剤、アディオン乳剤、パーマチオン水和剤は8月下旬～9月上旬に1回散布してください。</p> <p>②サイアノックス剤、トレボン剤、プレバソフロアブル5などは9月上旬に1～2回散布してください。</p>

野 菜	<p>きゅうりでは褐斑病や斑点細菌病の発生がやや多いと予想されます。発病部位は早めに取り除き、降雨が続く場合や病勢の進展が激しい場合は薬剤の散布間隔を短くしてください。</p> <p>トマトでは、灰色かび病の発生が多いと予想されます。ハウス内の換気に努め、発病前からの予防散布に努めてください。発病部位は早めに除去してください。</p>
果 樹	<p>各樹種とも早生品種の収穫が始まるため、薬剤の使用にあたっては使用時期に注意してください。</p> <p>りんごでは全ての病害が多いと予想されます。降雨が続くと予想される場合には散布間隔を短くしてください。虫害ではシンクイムシ類が県北部でやや多い、県中央部・県南部で多い、ナミハダニと果樹カメムシ類が多いと予想されます。シンクイムシ類やナミハダニの発生が多い園地では直ちに薬剤防除を実施してください。果樹カメムシ類の飛来が多い場合には、速やかに殺虫剤を散布してください。</p> <p>なしでは果樹カメムシ類の発生がやや多いと予想されます。園地への飛来が見られる場合は速やかに殺虫剤を散布してください。</p>

Ⅱ. 主要病害虫の向こう1か月の予報

作目名	病害虫名	対象地域	発生時期 感染時期	発生量・感染量	
				現況	予報
水 稲	穂いもち	全県	平年並	—	やや多い
	紋枯病	全県	—	平年並	平年並
	ニカメイガ (2回発生地帯の第2世代)	全県	—	多い	やや多い
	コブノメイガ	全県	—	多い	多い
	セジロウンカ (第2世代幼虫)	全県	早い	—	やや多い
	斑点米カメムシ類(第2世代成虫) (アカスジカスミカメ) (アカヒゲホソミドリカスミカメ)	全県	平年並 平年並 平年並	平年並 平年並 平年並	平年並 平年並 平年並
	アワヨトウ (第2世代幼虫)	全県	—	—	平年並
大 豆	紫斑病(子実)	全県	平年並	—	やや少ない
	アブラムシ類 (ジャガイモヒゲナガアブラムシ) (ダイズアブラムシ)	全県	平年並 平年並	やや少ない やや少ない	やや少ない やや少ない
	吸実性カメムシ類 (ホソヘリカメムシ)	全県	—	—	やや多い
	ウコンノメイガ	全県	やや遅い	やや少ない	やや少ない
	フタスジヒメハムシ	全県	—	—	少ない
	マメシンクイガ	全県	平年並	—	やや多い
	ダイズサヤタマバエ	全県	—	—	—
	食用性鱗翅目幼虫 (ツメクサガ)	全県	—	やや少ない	やや少ない
ねぎ (夏どり)	黒斑病・葉枯病	全県	—	やや少ない	やや少ない
	アザミウマ類 (ネギアザミウマ)	全県	—	少ない	やや少ない
	ネギハモグリバエ	全県	—	少ない	やや少ない
	シロイチモジヨトウ	全県	—	平年並	平年並
ねぎ (秋冬どり)	黒斑病・葉枯病	全県	—	やや少ない	やや少ない
	アザミウマ類 (ネギアザミウマ)	全県	—	平年並	平年並
	ネギハモグリバエ	全県	—	やや少ない	やや少ない
	シロイチモジヨトウ	全県	—	平年並	平年並

作目名	病害虫名	対象地域	発生時期 感染時期	発生量・感染量	
				現況	予報
きゅうり	べと病	全県	—	少ない	平年並
	うどんこ病	全県	—	多い	平年並
	褐斑病	全県	—	平年並	やや多い
	灰色かび病	全県	—	—	—
	斑点細菌病	全県	—	平年並	やや多い
	炭疽病	全県	—	やや少ない	平年並
	アブラムシ類 (ワタアブラムシ)	全県	—	やや少ない	やや少ない
	ワタヘリクロノメイガ	全県	—	やや少ない	やや少ない
	コナジラミ類 (オンシツコナジラミ)	全県	—	—	—
	アザミウマ類	全県	—	—	—
トマト	灰色かび病	全県	—	多い	多い
	葉かび病	全県	—	やや少ない	平年並
	ヒラズハナアザミウマ	全県	—	やや少ない	やや少ない
	オオタバコガ	全県	—	やや少ない	やや少ない
えだまめ	べと病	全県	—	—	—
	ツメクサガ	全県	—	やや少ない	やや少ない
	ダイズサヤタマバエ	全県	—	—	—
りんご	斑点落葉病	全県	—	多い	多い
	黒星病	全県	—	やや多い	多い
	炭疽病	全県	平年並	平年並	多い
	輪紋病	全県	—	—	多い
	褐斑病	全県	—	多い	多い
	シンクイムシ類	県北部 県中央部・県南部	— —	やや多い 多い	やや多い 多い
	ナミハダニ	全県	—	多い	多い
	リンゴハダニ	全県	—	やや多い	やや多い
	果樹カメムシ類	全県	—	多い	多い
	キンモンホソガ	全県	平年並	平年並	平年並
なし	黒星病	県北部・県中央部	—	やや少ない	平年並
	黒斑病	県北部・県中央部	—	少ない	平年並
	輪紋病	全県	—	—	多い
	シンクイムシ類	県北部・県中央部	—	少ない	やや少ない
	ナミハダニ	県北部・県中央部	—	やや少ない	やや少ない
	リンゴハダニ	県北部・県中央部	—	やや少ない	やや少ない
	果樹カメムシ類	県北部・県中央部	—	多い	やや多い
ぶどう	べと病	県南部	—	平年並	多い
	灰色かび病	県南部	—	やや多い	多い
	晩腐病	県南部	やや早い	平年並	やや多い
	チャノキイロアザミウマ	県南部	—	平年並	やや少ない

Ⅲ. 発生予報と防除対策

A 水稻

病虫害名	予報内容	
	発生時期	発生量
1. 穂いもち	平年並（前年より遅い）	やや多い（前年よりやや少ない）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の降水量は平年並か多い、日照時間は平年並か少ないと予報されている（ / +）。

イ、各地域振興局の水稻定点調査によると、7月22日現在のあきたこまちの葉数は11.9葉（平年差-0.4葉）で少ない、葉緑素計値は40.8（平年比107%）で高かった。但し、本年は調査基準日より3日早い調査であった（±/±）。

ウ、7月1半旬以降、BLASTAM（アメダスデータを用いた葉いもち発生予測プログラム）判定において感染好適日が断続的に出現しており、また、予察ほ及び防除適期決定ほにおける病斑増加調査では7月2半旬以降、病斑が急増している地点も見られる（ / +）。

エ、7月4～6半旬の抽出ほ場調査における葉いもちの発病株率は5.8%（平年3.5%）でやや高い、発病地点率は17.5%（平年18.0%）で平年並だった（ / +）。

また、上位葉の発病株率は0.33%（平年0.23%）で平年並、発病地点率は5.0%（平年2.9%）でやや高かった（ / ±）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、ほ場を巡回し、上位葉に病斑が見られるほ場では直ちに薬剤防除を実施する。また、育苗箱施用剤等を施用していないほ場、中山間地のいもち病常発地帯、葉色が極端に濃いほ場等では今後葉いもちの発生及び穂いもちへの進展が懸念されるため、早めにはほ場を確認し薬剤防除を実施する。

イ、ほ場によって出穂期が異なることから、出穂状況を確認して茎葉散布を行う。

ウ、葉いもちの発生が認められるほ場では、出穂直前と穂揃期にトライ剤、ラブサイド剤、ビーム剤のいずれかで茎葉散布を行う。

エ、葉いもちが多発しているほ場では、出穂15～7日前にコラトップ粒剤、ゴウケツ粒剤、サンブラス粒剤のいずれかを散布するか、出穂直前にトライ剤又はビーム剤と穂揃期にトライ剤又はラブサイド剤の茎葉散布に加え、必要に応じて傾穂期にもラブサイド剤による追加防除を行う。

オ、薬剤の使用に当たっては、フサライド剤（ラブサイド剤、ブラシン剤等）の使用回数は3回以内、トリシクラゾール剤（ビーム剤、ノンブラス剤等）の本田での使用回数は3回以内なので注意する。

病虫害名	予報内容	
	発生時期	発生量
2. 紋枯病	—	平年並（前年よりやや多い）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温はほぼ平年並、降水量は平年並か多いと予報されている（ / ±）。

イ、各地域振興局の水稻定点調査によると、7月22日現在のあきたこまちの茎数は505本/m²（平年比103%）でやや多い。但し、本年は調査基準日より3日早い調査であった（ / ±）。

ウ、7月4～6半旬の抽出ほ場調査における発病株率は1.2%（平年1.7%）、発病地点率は11.3%（平年14.7%）で、いずれも平年並だった（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、穂ばらみ期の発生状況を確認し、発病株率が15%を超える場合は出穂直前～穂揃期にバシタック剤、バリダシン剤、モンカット剤、モンセレン剤のいずれかを株元に到達するように茎葉散布する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
3. ニカメイガ (2回発生地帯の第2世代)	—	やや多い(前年より多い)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温はほぼ平年並と予報されている（ /±）。

イ、7月4～6半旬の抽出ほ場調査における第1世代の食害株率は0.17%（平年0.04%）、心枯茎率は0.007%（平年0.001%）、食害地点率は3.8%（平年0.7%）でいずれも高かった（ /+）。しかし、収量に影響があるとされる心枯茎率5%を超える地点はなかった（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、防除を必要とするほ場は少ないと見込まれる。

イ、防除が必要な場合は、エルサン粉剤3DL、エルサン乳剤、スミチオン粉剤3DL、スミチオン乳剤、パダン粉剤DL、パダン粒剤4、パダンSG水溶剤のいずれかで行う。

ウ、水面施用剤は湛水状態で田面に均一に散布し、散布後4～5日間は入水しない。また、周辺環境に配慮し、散布後7日間は落水、かけ流しはしない。漏水田では使用しない。

エ、エルサン剤は、散布後少なくとも7日間は落水、かけ流しはしない。

オ、パダン粒剤4は水産動植物への影響が強いので、施用後、田面水を用水路等に流出させない。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
4. コブノメイガ	—	多い(前年より多い)

(1) 予報の根拠

ア、7月4～6半旬の抽出ほ場調査における上位葉食害株率は0.61%（平年0.02%）、上位葉食害葉率は0.022%（平年0.000%）、食害地点率は3.8%（平年0.4%）でいずれも高かった（ /+）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、防除を必要とするほ場は少ないと見込まれる。

イ、防除が必要な場合は、パダン粉剤DL、パダンSG水溶剤、MR. ジョーカー粉剤DL、MR. ジョーカーEWのいずれかで行う。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
5. セジロウンカ (第2世代幼虫)	早い (-)	やや多い (前年より多い)

(1) 予報の根拠

- ア、向こう1か月の気温はほぼ平年並と予報されている (±/)
- イ、秋田市予察ほにおける初飛来日は6月18日 (平年7月4日)、すくい取りによる成虫の盛期は7月5半旬 (平年7月6半旬) でいずれも平年より早かった (-/+)。
- ウ、7月4～6半旬の抽出ほ場調査における成虫のすくい取り数は2.5頭 (平年0.8頭) で多かったが、粘着板法による10株当たり幼虫数は1.2頭 (平年4.4頭) でやや少なかった (/±)。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、第2世代幼虫の防除適期 (ふ化盛期) は8月中旬と予想されるが、斑点米カメムシ類との同時防除が可能である。ただし、キラップ剤はセジロウンカに対し効果が劣る。
- イ、葉色が濃いほ場で多発する場合がありますので注意する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
6. 斑点米カメムシ類 (アカスジカスミカメ) (アカヒゲホソミドリカスミカメ) (第2世代成虫)	平年並 (前年より遅い) 平年並 (前年より遅い) 平年並 (前年より遅い)	平年並 (前年より少ない) 平年並 (前年より少ない) 平年並 (前年より少ない)

(1) 予報の根拠

- ア、向こう1か月の気温はほぼ平年並、降水量は平年並か多いと予報されている (±/±)。
- イ、7月4～6半旬の抽出ほ場調査における畦畔でのアカスジカスミカメ (以下アカスジ) のすくい取り数は0.9頭 (平年1.8頭) で少なく、発生地点率は12.5% (平年16.7%) でやや低かった。アカヒゲホソミドリカスミカメ (以下アカヒゲ) は0.7頭 (平年1.8頭) でやや少なく、発生地点率は21.5% (平年28.5%) でやや低かった (/-)。
- 水田内でのアカスジのすくい取り数は0.4頭 (平年0.5頭) で平年並、発生地点率は6.3% (平年7.8%) でやや低かった。アカヒゲは0.1頭 (平年0.2頭) でやや少なく、発生地点率は10.0% (平年8.5%) で平年並だった (/±)。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、出穂期 (ほ場全体の40～50%が出穂した日) の把握に努め、出穂期10日後頃にアルバリン/スタークル剤の茎葉散布剤を畦畔を含めたほ場全体に散布する。
- イ、出穂期10日後頃の茎葉散布剤の散布当日から7日後までに畦畔や農道の草刈りを必ず行う。
- ウ、水田内に出穂したノビエやホタルイ類等が発生しているほ場、イネ科雑草が主体の牧草地や休耕田等の発生源に隣接しているほ場では、出穂期10日後頃に加えて同24日後頃にもエクシード剤又はキラップ剤の茎葉散布剤を散布する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
7. アワヨトウ（第2世代幼虫）	—	平年並（前年並）

(1) 予報の根拠

ア、6月4～5半旬の第1世代幼虫は、小麦巡回調査において確認されず、牧草地巡回調査において0.01頭/m²（平年0.34頭/m²）でやや少なかった（ /-）。

イ、7月4半旬までの糖蜜トラップにおける総誘殺数は、能代市24頭（平年5.6頭）、由利本荘市8頭（平年1.8頭）、両地点では32頭（平年7.8頭）でいずれも多かった（ /+）。

ウ、7月4～6半旬の抽出ほ場調査において幼虫及び成虫は確認されなかった（ /-）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、防除を必要とする水田は少ないと見込まれるが、葉色が濃い水田、いもち病によるズリコミ田、水害跡など軟弱な稲に発生する機会が多いため、注意深く観察する。また、群生相となった黒化型の幼虫が確認された場合は直ちにスミチオン乳剤で防除する。

イ、本種は突発的に発生することがあるので、今後の予察情報に注意する。

8. その他病害虫の発生予報と防除対策

病害虫名	発生時期	発生量		防除上注意すべき事項
		現況	予想	
トビイロウンカ	—	平年並	平年並	7月22日現在、飛来は確認されていない。7月4～6半旬の抽出ほ場調査において発生は確認されなかった。
ヒメトビウンカ	—	少ない	少ない	7月4～6半旬の抽出ほ場調査におけるすくい取り数は少なかった。斑点米カメムシ類との同時防除が可能である。
ツマグロヨコバイ	—	平年並	平年並	7月4～6半旬の抽出ほ場調査において発生は確認されなかった。
フタオビコヤガ	—	やや少ない	やや少ない	7月4～6半旬の抽出ほ場調査における食害株率は0.2%（平年18.1%）でやや少なく、防除を必要とするほ場は少ないと見込まれる。

B 大豆

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	感 染 時 期	感 染 量
1. 紫斑病（子実）	平年並（-）	やや少ない（前年並）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温はほぼ平年並、降水量は平年並か多いと予報されている（±/±）。

イ、各地域振興局の調査によると、播種盛期は6月12日（平年6月11日）であったことから、開花期は平年並と見込まれる（±/ ）。。

ウ、前年収穫期の被害粒率は平年並みだった（ /±）。

エ、種子塗沫処理による防除が普及している（ /－）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、開花期20～30日後にアミスター20フロアブル、ニマイバー水和剤、ベルコート水和剤、ベルコートフロアブル、プランダム乳剤25、Zボルドー、Zボルドー粉剤DLのいずれかで防除する。

ただし、着莢期に降雨が多い場合は1回目防除の約10日後に追加防除を行う。

イ、耐性菌出現回避のため、同系統の薬剤の連用を避ける。

ウ、薬剤は莢によく付着するように散布する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期 (発 生 盛 期)	発 生 量
2. アブラムシ類 (ジャガイモヒゲナガアブラムシ) (ダイズアブラムシ)	平年並 (－) 平年並 (－)	やや少ない (前年並) やや少ない (前年並)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温はほぼ平年並と予報されている（ジャガイモヒゲナガアブラムシ（±/±）、ダイズアブラムシ（±/±））。

イ、7月5半旬の秋田市予察ほにおける発生株率はジャガイモヒゲナガアブラムシが0%（平年2.8%）、ダイズアブラムシも0%（平年3.9%）でいずれもやや低かった（ /－）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、発生が多く見られる場合はアグロスリン乳剤などで防除する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
3. 吸実性カメムシ類 (ホソヘリカメムシ)	－	やや多い (前年よりやや少ない)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温はほぼ平年並、降水量は平年並か多いと予報されている（ /±）。

イ、前年の収穫期の被害粒率は高かった（ /+）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、マメシンクイガとの同時防除に努める。ただし、農薬の適用情報に注意する。

イ、薬剤は莢によく付着するように散布する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
4. ウコンノメイガ	やや遅い (－)	やや少ない (前年並)

(1) 予報の根拠

ア、7月5半旬の秋田市予察ほ調査において産卵は確認されていない（平年産卵盛期7月3半旬）（ +/ ）。

イ、7月4～6半旬の巡回調査における叩き出し成虫数は0.6頭（平年1.2頭）で平年並、茎当たり卵塊数は0.02個（平年0.07個）でやや少なかった。（ /－）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、被害は生育が旺盛なほ場で多い傾向にあるので注意する。

イ、7月6半旬にはほ場全体で40～60茎の葉巻数を調査して、茎当たり葉巻数が1.3個以上の場合は、8月上旬までにカスケード乳剤、スミチオン乳剤などで防除する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
5. フタスジヒメハムシ	—	少ない（前年よりやや少ない）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温はほぼ平年並、降水量は平年並か多いと予報されている（ /±）。

イ、前年の収穫期の被害粒率はやや低かった（ /-）。

ウ、種子塗沫処理による防除が普及している（ /-）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、マメシンクイガとの同時防除に努める。ただし、農薬の適用情報に注意する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
6. マメシンクイガ	平年並（前年並）	やや多い（前年より多い）

(1) 予報の根拠

ア、成虫の羽化は日長に大きく影響されるため、発生時期の変動は小さい（±/ ）。

イ、前年の収穫期の被害粒率はやや高かった（ /+）。

ウ、各地域振興局の調査によると、播種盛期は6月12日（平年6月11日）であったことから、開花期は平年並と見込まれる（±/ ）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、連作により密度が高まるので、連作ほ場では次のいずれかで防除する。

①アグロスリン乳剤、アディオオン乳剤、パーマチオン水和剤は8月下旬～9月上旬に1回散布する。

②サイアノックス剤、トレボン剤、プレバソフロアブル5などは9月上旬に1～2回散布する。

イ、薬剤は莢によく付着するように散布する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
7. ダイズサヤタマバエ	—	—（前年並）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温はほぼ平年並と予報されている（ /±）。

イ、7月中旬のえだまめ巡回調査における被害茎率は0%（前年0%）だった。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、開花日10日後頃にアルバリン剤／スタークル剤、スミチオン乳剤、トレボン乳剤などで防除する。

イ、薬剤は莢によく付着するように散布する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
8. 食葉性鱗翅目幼虫 (ツメクサガ)	—	やや少ない (前年よりやや少ない)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温はほぼ平年並と予報されている (/±)。

イ、7月中旬のえだまめ巡回調査における発生茎率は1.1% (平年2.4%) でやや少なかった (/ -)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、幼虫の発生初期にエルサン乳剤、トレボン乳剤、フェニックスフロアブルのいずれかを散布する。老齢期になると防除効果が劣るので若齢期に散布する。

C ねぎ (夏どり)

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
1. 黒斑病・葉枯病	—	やや少ない (前年よりやや少ない)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温はほぼ平年並、降水量はほぼ平年並か多いと予報されている (/±)。

イ、7月4半旬の巡回調査における発病株率は1.5% (平年4.2%) でやや低かった (/ -)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、降雨が続くと発病しやすいので予防や発病初期の防除に努める。

イ、肥料切れや生育後期など草勢が衰えてくると多発するので注意する。

ウ、べと病やさび病などの病斑や害虫の食害痕に二次的に感染する場合は多いので注意する。

エ、本両病害は病徴観察による識別が困難であるため、両方に効果のある薬剤であるアミスター20フロアブル、ダコニール1000、テーク水和剤、パレード20フロアブルなどに展着剤を加用して散布する。その際は収穫前日数に注意する。また、アミスター20フロアブルは近接散布するとねぎを湾曲させる薬害を生じる場合があるので、散布間隔を2週間以上とする。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
2. アザミウマ類 (ネギアザミウマ)	—	やや少ない (前年より少ない)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温はほぼ平年並、降水量は平年並か多いと予報されている (/±)。

イ、7月4半旬の巡回調査における食害株率は17.5% (平年25.2%) で低かった (/ -)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、多発すると防除効果が劣るので、発生初期から、アドマイヤー顆粒水和剤、アルバリン/スタークル顆粒水溶剤、グレーシア乳剤、スピノエース顆粒水和剤、ダントツ水溶剤、ディアナSC、ファインセーブフロアブルなどを茎葉散布、または、ダントツ粒剤を株元散布する。その際は収

穫前日数に注意する。

イ、薬剤感受性の低下を回避するため、同一薬剤、同一系統薬剤の連用を避け、系統または作用機
作の異なる薬剤をローテーションして使用する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
3. ネギハモグリバエ	—	やや少ない（前年よりやや多い）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温はほぼ平年並、降水量は平年並か多いと予報されている（ /±）。

イ、7月4半旬の巡回調査における食害株率は0.2%（平年13.9%）で低かった（ /—）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、多発すると防除効果が劣るので、発生初期から、アグロスリン乳剤、グレーシア乳剤、ダイア
ジノン乳剤40、ディアナSC、ファインセーブフロアブル、リーフガード顆粒水和剤などを茎葉
散布する。その際は収穫前日数に注意する。

イ、薬剤感受性の低下を回避するため、同一薬剤、同一系統薬剤の連用を避け、系統または作用機
作の異なる薬剤をローテーションして使用する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
4. シロイチモジヨトウ	—	平年並（前年並）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温はほぼ平年並、降水量は平年並か多いと予報されている（ /±）。

イ、7月4半旬の巡回調査における食害株率は0%（平年0%）で平年並だった（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、散布時期が遅れると効果が劣るので、発生初期からアグロスリン乳剤、アディオン乳剤、カス
ケード乳剤、ゼンターリ顆粒水和剤、ノーモルト乳剤などを茎葉散布する。その際は収穫前日数
に注意する。

イ、薬剤感受性の低下を回避するため、同一薬剤、同一系統薬剤の連用を避け、系統または作用機
作の異なる薬剤をローテーションして使用する。

D ねぎ（秋冬どり）

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
1. 黒斑病・葉枯病	—	やや少ない（前年より少ない）

(1) 予報の根拠

- ア、向こう1か月の気温はほぼ平年並、降水量は平年並か多いと予報されている（ /±）。
 イ、7月4半旬の巡回調査における発病株率は0.4%（平年1.3%）でやや低かった（ /-）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、ねぎ（夏どり）に準じる。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
2. アザミウマ類（ネギアザミウマ）	—	平年並（前年よりやや少ない）

(1) 予報の根拠

- ア、向こう1か月の気温はほぼ平年並、降水量は平年並か多いと予報されている（ /±）。
 イ、7月4半旬の巡回調査における食害株率は12.7%（平年13.8%）で平年並だった（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、ねぎ（夏どり）に準じる。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
3. ネギハモグリバエ	—	やや少ない（前年よりやや少ない）

(1) 予報の根拠

- ア、向こう1か月の気温はほぼ平年並、降水量は平年並か多いと予報されている（ /±）。
 イ、7月4半旬の巡回調査における食害株率は1.2%（平年12.4%）でやや低かった（ /-）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、ねぎ（夏どり）に準じる。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
4. シロイチモジヨトウ	—	平年並（前年並）

(1) 予報の根拠

- ア、向こう1か月の気温はほぼ平年並、降水量は平年並か多いと予報されている（ /±）。
 イ、7月4半旬の巡回調査における食害株率は0%（平年0%）で平年並だった（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、ねぎ（夏どり）に準じる。

E きゅうり

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
1. ベと病	—	平年並（前年よりやや少ない）

(1) 予報の根拠

- ア、向こう1か月の降水量は平年並か多いと予報されている（ /+）。
- イ、7月4半旬の巡回調査における発病株率は7.3%（平年17.5%）で低かった（ /-）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、草勢が衰えると発病しやすくなるので草勢の維持に努める。
- イ、風雨などにより損傷した茎葉の整理を行い、発病前に予防剤を散布する。
- ウ、発病を確認した場合は、アミスター20フロアブル、ゾーベック エニベル、ベトファイター顆粒水和剤、ホライズンドライフロアブルなどの治療効果がある薬剤を散布する。
- エ、薬害防止のため、アミスター20フロアブルは浸透性を高める展着剤を加用しない。また、高温時の使用を避ける。
- オ、耐性菌出現回避のため、同一系統薬剤の連用を避ける。
- カ、降雨が続く場合や病勢の進展が激しい場合は、薬剤の散布間隔を短くする。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
2. うどんこ病	—	平年並（前年よりやや少ない）

(1) 予報の根拠

- ア、向こう1か月の降水量は平年並か多いと予報されている（ /-）。
- イ、7月4半旬の巡回調査における発病株率は5.1%（平年0.3%）、発生地点率は10.0%（平年2.5%）でいずれも高かった（ /+）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、発病を確認した場合は、アミスター20フロアブル、E B I 剤（サブロール乳剤等）、ポリオキシシリンAL水和剤、ポリベリン水和剤、パルミノなどの治療効果のある薬剤を葉の表裏にかかるとように散布する。
- イ、薬害防止のため、アミスター20フロアブルは浸透性を高める展着剤を加用しない。また、高温時の使用を避ける。
- ウ、耐性菌出現回避のため、同一系統薬剤の連用を避ける。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
3. 褐斑病	—	やや多い（前年より多い）

(1) 予報の根拠

- ア、向こう1か月の降水量は平年並か多いと予報されている（ /+）。
- イ、7月4半旬の巡回調査における発病株率は1.0%（平年1.4%）で平年並だった（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、発病した葉は早めに除去し、ほ場外で処分する。
- イ、発生後の防除は効果が劣るので、発病前からシトラノフロアブル、ジマンダイセン水和剤、セイビアーフロアブル20、ダコニール1000などの予防剤を中心に散布する。発病を確認した場合は、スミブレンド水和剤などの治療効果がある薬剤を散布する。
- ウ、ベンゾイミダゾール系剤、SDHI剤、QoI剤では耐性菌が確認されているため、防除しても効果が低い場合は異なる系統の薬剤を選択し、散布する。また、同一系統薬剤の連用を避ける。
- エ、降雨が続く場合や病勢の進展が激しい場合は薬剤の散布間隔を短くする。

病虫害名	予報内容	
	発生時期	発生量
4. 灰色かび病	—	— (前年よりやや多い)

(1) 予報の根拠

- ア、向こう1か月の降水量は平年並か多いと予報されている（ /+）。
- イ、7月4半旬の巡回調査における発病株率は0.2%（前年0%）だった。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、多湿時に発生しやすいので、ハウス内の換気に努める。
- イ、発病を確認した場合は、アミスター20フロアブル、スミブレンド水和剤などの治療効果のある薬剤を散布する。
- ウ、薬害防止のため、アミスター20フロアブルは浸透性を高める展着剤を加用しない。また、高温時の使用を避ける。
- エ、耐性菌出現回避のため、同一系統薬剤の連用を避ける。

病虫害名	予報内容	
	発生時期	発生量
5. 斑点細菌病	—	やや多い (前年よりやや少ない)

(1) 予報の根拠

- ア、向こう1か月の気温はほぼ平年並、降水量は平年並か多いと予報されている（ /+）。
- イ、7月4半旬の巡回調査における発病株率は7.8%（平年7.3%）で平年並だった（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、発病した葉、茎、果実は早めに除去し、ほ場外で処分する。
- イ、銅剤又はその混合剤により防除に努める。
- ウ、降雨が続く場合や病勢の進展が激しい場合は薬剤の散布間隔を短くする。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
6. 炭疽病	—	平年並（前年より多い）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の降水量は平年並か多いと予報されている（ /+）。

イ、7月4半旬の巡回調査における発病株率は0.2%（平年2.0%）でやや低かった（ /-）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、発病した葉、茎、果実は早めに除去し、ほ場外で処分する。

イ、予防散布に努める。発病を確認した場合は、アミスター20フロアブル、ゲッター水和剤などの治療効果がある薬剤を散布する。

ウ、薬害防止のため、アミスター20フロアブルは浸透性を高める展着剤を加用しない。また、高温時の使用を避ける。

エ、降雨が続く場合や病勢の進展が激しい場合は薬剤の散布間隔を短くする。

オ、耐性菌出現回避のため、同一系統薬剤の連用を避ける。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
7. アブラムシ類 (ワタアブラムシ)	—	やや少ない（前年よりやや少ない）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温はほぼ平年並と予報されている（ /±）。

イ、7月4半旬の巡回調査における発生株率は8.1%（平年10.2%）でやや低かった（ /-）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、定期的に薬剤を散布する。

イ、抵抗性出現回避のため、同一系統薬剤の連用を避ける。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
8. ワタヘリクロノメイガ	—	やや少ない（前年よりやや多い）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温はほぼ平年並と予報されている（ /±）。

イ、7月4半旬の巡回調査における食害株率は0%（平年0.7%）でやや低かった（ /-）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、初期被害を早期に発見し、若齢幼虫期に防除する。

イ、発生が多いときは、アフーム乳剤、コテツフロアブルなどで防除する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
9. コナジラミ類 (オンシツコナジラミ)	—	— (前年並)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温はほぼ平年並と予報されている（ /±）。

イ、7月4半旬の巡回調査における寄生株率は0%（前年0%）だった。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、摘葉後、残さを早期に処分する。

イ、発生が多いときは、アディオソ乳剤、モスピラン顆粒水溶剤などで防除する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
10. アザミウマ類	—	— (前年よりやや少ない)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温はほぼ平年並と予報されている（ /±）。

イ、7月4半旬の巡回調査における寄生株率は19.4%（前年30.4%）だった。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、定期的に薬剤を散布する。

イ、周辺雑草の除草を徹底する。

ウ、発生が多いときは、アーデント水和剤、アクタラ顆粒水溶剤、コテツフロアブル、モスピラン顆粒水溶剤のいずれかで防除する。

F トマト

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
1. 灰色かび病	—	多い(前年よりやや多い)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の降水量は平年並か多いと予報されている（ /+）。

イ、7月中旬の巡回調査における発病株率は5.5%（平年0.4%）、発病度は1.4（平年0.1）でいずれも高かった（ /+）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、多湿時に発生しやすいので、ハウス内の換気に努める。

イ、発病部位は早めに除去し、ほ場外で処分する。

ウ、発病前からの予防散布に努める。ただし、耐性菌出現回避のため同一系統薬剤の連用を避ける。特にベンゾイミダゾール系剤、ジカルボキシイミド系剤は耐性菌が確認されているため薬剤の選択に注意する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
2. 葉かび病	—	平年並（前年より少ない）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の降水量は平年並か多いと予報されている（ /+）。

イ、7月中旬の巡回調査における発病株率は0%（平年9.9%）、発病度は0（平年2.5）でいずれもやや低かった（ /-）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、多湿時に発生しやすいので、ハウス内の換気に努める。

イ、発病部位は早めに除去し、ほ場外で処分する。

ウ、発病前からの予防散布に努める。ただし、耐性菌出現回避のため同一系統薬剤の連用を避ける。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
3. ヒラズハナアザミウマ	—	やや少ない（前年より少ない）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温はほぼ平年並、降水量は平年並か多いと予報されている（ /±）。

イ、北秋田市予察ほにおける7月中旬の青色粘着板への誘殺数は77頭（平年398頭）でやや少なかった（ /-）。

ウ、7月中旬の巡回調査における被害果率は0%（平年0%）で平年並だった（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、ハウス周辺の雑草地は発生源となるため除草に努める。

イ、スピノエース顆粒水和剤、バストガード水溶剤、モスピラン顆粒水溶剤などを花房に付着するよう丁寧に散布する。ただし、抵抗性出現回避のため同一系統薬剤の連用を避ける。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
4. オオタバコガ	—	やや少ない（前年よりやや少ない）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温はほぼ平年並、降水量は平年並か多いと予報されている（ /±）。

イ、秋田市防除適期決定ほにおける7月1～4半旬のフェロモントラップへの誘殺数は0頭（平年0.7頭）でやや少なかった（ /-）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、被害痕を発見したら、幼虫が近くに潜んでいるので注意深く観察し、捕殺する。

イ、初期被害を早期に発見し、若齢幼虫期に防除する。

5. その他病害虫の発生予報と防除対策

病害虫名	発生時期	発生量		防除上注意すべき事項
		現況	予想	
疫病	—	平年並	平年並	防除が必要な場合は少ないと見込まれる。
アブラムシ類 (リタアブラムシ) (モアアブラムシ)	—	平年並	平年並	防除が必要な場合は少ないと見込まれる。

G えだまめ

病害虫名	予報内容	
	発生時期	発生量
1. ベと病	—	— (前年並)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の降水量は平年並か多いと予報されている（ /±）。

イ、7月中旬の巡回調査における発生茎率は0%（前年0%）だった。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、汚損莢の防除において、1回散布では開花日から開花3日後散布の効果が高い。

イ、フェスティバルC水和剤、ランマンフロアブル、ライメイフロアブル、レーバスフロアブルを散布する。

ウ、薬剤を散布する場合は葉裏にかかるように散布する。

病害虫名	予報内容	
	発生時期	発生量
2. ツメクサガ	—	やや少ない（前年より少ない）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温はほぼ平年並と予報されている（ /±）。

イ、7月中旬の巡回調査における発生茎率は1.1%（平年2.4%）でやや低かった（ /-）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、老齢期になると防除効果が劣るので、幼虫の発生初期にトレボン乳剤、フェニックスフロアブルを散布する。

病害虫名	予報内容	
	発生時期	発生量
3. ダイズサヤタマバエ	—	— (前年並)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温はほぼ平年並と予報されている（ /±）。

イ、7月中旬の巡回調査における被害茎率は0%（前年0%）だった。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、中晩生品種では開花日10日後頃に1回、晩生品種では開花日7日後頃および14日後頃の2回、アルバリン顆粒水溶剤／スタークル顆粒水溶剤またはアルバリン粉剤DL／スタークル粉剤DLを使用する。
- イ、中晩生品種または晩生品種でスミチオン乳剤、トレボン乳剤、ダイアジノン粒剤5を使用する場合は、開花日頃～開花日7日後頃に2回使用する。※開花日：ほ場全体で50%程度の開花が確認された日とする。
- ウ、粉剤DL、乳剤、顆粒水溶剤は莢によく付着するように散布する。粒剤はほ場全体に均一に散布する。

H りんご

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
1. 斑点落葉病	—	多い（前年より多い）

(1) 予報の根拠

- ア、向こう1か月の降水量は平年並か多いと予報されている（ /+）。
- イ、7月中旬の巡回調査における発病葉率は6.3%（平年1.6%）、発病地点率は95.5%（平年63.9%）でいずれも高かった（ /+）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、薬剤は約2週間間隔で散布するが、降雨が続くと予想される場合は散布間隔を短くする。
- イ、高温・多雨の多発条件下では、ポリオキシシAL水和剤、ロブラール水和剤、ユニックス顆粒水和剤47のいずれかを主剤に加用して散布する。なお、これらの薬剤は年間1回の使用とする。ただし、ポリオキシシAL水和剤の効力低下がみられる園地では同剤を使用しない。
- ウ、QoI剤は耐性菌出現回避のため、年間2回以内の使用とする。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
2. 黒星病	—	多い（前年より多い）

(1) 予報の根拠

- ア、向こう1か月の降水量は平年並か多いと予報されている（ /+）。
- イ、7月中旬の巡回調査における発病地点率は22.7%（平年17.0%*）でやや多かった（ /+）。
※過去4年間の平均

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、発病部位は直ちに摘み取り適切に処分する。
- イ、夏期の高温乾燥条件下では発生が抑制されるものの、秋期の降雨により感染が再び拡大するおそれがあるため、降雨が続くと予想される場合は散布間隔を短くする。
- ウ、発生園ではQoI剤の使用を中止し、保護殺菌剤を10日間隔で散布する。
- エ、発生のない園地ではQoI剤を使用できるが、必ず作用機作の異なる保護殺菌剤（ベルコート水和剤、有機銅剤等）を加用する。また、耐性菌出現を回避するため年間2回以内の使用を厳守する。
- オ、スピードスプレーの走行はできるだけ遅くし、十分量を散布する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
3. 炭疽病	平年並（－）	多い（前年より多い）

(1) 予報の根拠

ア、りんごの生育は概ね平年並に推移している（±/ ）。。

イ、向こう1か月の降水量は平年並か多いと予報されている（ /+）。

ウ、7月中旬の巡回調査における発病果率は0%（平年0%）で平年並だった（ /±）。

エ、主産地における7月上中旬の降水量は多い～かなり多かったため、感染量は多かったと推定される（ /+）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、ニセアカシアは伝染源となるため、園地の近くにある木は伐採する。

イ、二次感染防止のため、発病果は直ちに摘み取り、土中に埋める。

ウ、薬剤は約2週間間隔で散布するが、降雨が続くと予想される場合は散布間隔を短くする。

エ、QoI剤は耐性菌出現回避のため、年間2回以内の使用とする。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	感 染 時 期	感 染 量
4. 輪紋病	－	多い（－）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の降水量は平年並か多いと予報されている（ /+）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、枝幹のいぼ病斑は削り取り、トップジンMペーストを塗布する。本剤の総使用回数（3回）に注意する。

イ、薬剤は約2週間間隔で散布するが、降雨が続くと予想される場合は散布間隔を短くする。

ウ、QoI剤は耐性菌出現回避のため、年間2回以内の使用とする。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
5. 褐斑病	－	多い（前年より多い）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の降水量は平年並か多いと予報されている（ /+）。

イ、7月中旬の巡回調査における発病新梢率は0.2%（平年0%）で高かった（ /+）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、薬剤は約2週間間隔で散布するが、降雨が続くと予想される場合は散布間隔を短くする。

イ、多発が予想される場合は、8月上旬にトップジンM水和剤又はベンレート水和剤を主剤に加用して散布する。なお、トップジンM水和剤、ベンレート水和剤は耐性菌出現回避のため、年間1～2回の使用とするが、これらの効力が低下している園地では、ユニックス顆粒水和剤47を主剤に加用して散布する。

ウ、QoI剤は耐性菌出現回避のため、年間2回以内の使用とする。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
6. シンクイムシ類 (モモシンクイガ)	—	県北部 : やや多い (前年並) 県中央部・県南部 : 多い (前年並)

(1) 予報の根拠

ア、大館市防除適期決定ほにおける6月1半旬～7月4半旬のフェロモントラップへの総誘殺数は34頭(平年26頭)でやや多かった(/+)。

イ、7月中旬の巡回調査における県中央部・県南部の被害果率は0.1%(平年0.0%)、被害地点率は7.1%(平年1.4%)でいずれも高かった(/+)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、被害果は直ちに摘み取り、6日以上水漬けする。

イ、成虫の飛来や産卵が多い園地では直ちに薬剤防除を行う。

ウ、薬剤の選定にあたっては、早生品種や中生品種の収穫予定日等を十分に考慮する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
7. ナミハダニ	—	多い (前年並)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温はほぼ平年並と予報されている(/±)。

イ、7月中旬の巡回調査における1葉当たりの発生頭数は1.8頭(平年0.2頭)で多く、発生地点率は68.2%(平年39.2%)と高かった。(/+)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、発生が多い園地では、殺ダニ剤を散布する。

イ、コロマイト乳剤は薬害(黄変落葉)が発生するおそれがあるため高温時には使用しない。また、薬害(葉の黄変、葉裏の褐変)が発生するおそれがあるため、本剤とストライド顆粒水和剤又はスミチオン水和剤40は混用しない。

ウ、ハダニ類は薬剤抵抗性が発達しやすいため、殺ダニ剤は1薬剤1年1回使用、かつ作用点が同一の殺ダニ剤は年間1回使用として、効力低下を防止する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
8. リンゴハダニ	—	やや多い (前年よりやや多い)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温はほぼ平年並と予報されている(/±)。

イ、7月の巡回調査における1葉当たり発生頭数は0.0頭(平年0.0頭)で平年並だったが、発生地点率は9.1%(平年5.0%)でやや高かった(/+)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、発生が多い園地では、ただちに殺ダニ剤を散布する。

イ、ハダニ類は薬剤抵抗性が発達しやすいため、殺ダニ剤は1薬剤1年1回使用、かつ作用点が同一の殺ダニ剤は年間1回使用として、効力低下を防止する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
9. 果樹カメムシ類 (クキカメムシ、チャバネオカメムシ)	—	多い (前年より多い)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温はほぼ平年並と予報されている (/±)。

イ、7月中旬の巡回調査における被害果率は0.1% (平年0.1%) で平年並、被害地点率は27.3% (平年13.7%) で高かった (/+)。

ウ、防除適期決定ほ (県内7地点) における5月1半旬～7月4半旬のチャバネオカメムシフェロモントラップへの果樹カメムシ類の総誘殺数は1,208頭 (平年555頭) で多かった (/+)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、園内への飛来時期は年次変動が大きく、飛来数は地域によって異なるため、飛来状況を良く確認する。新成虫の加害は山間部や林地に隣接する園地で多いため特に注意する。

イ、園内への飛来が見られる場合は、ネオニコチノイド剤、合成ピレスロイド剤のいずれかを散布する。

ウ、薬剤の選定にあたっては、早生品種や中生品種の収穫予定日等を十分に考慮する。

エ、アルバリン顆粒水溶剤とスタークル顆粒水溶剤は同一成分の薬剤であるため、総使用回数に注意する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
10. キンモンホソガ (第4世代幼虫)	平年並 (前年より早い)	平年並 (前年よりやや多い)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温はほぼ平年並と予報されている (±/)。

イ、7月中旬の巡回調査における被害葉率は0.1% (平年0.3%) で平年並だった (/±)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、被害葉は集めて焼却するか土中に埋める。

イ、防除適期は、県北部が8月4～5半旬、県中央部・県南部が8月3～4半旬と見込まれる。

11. その他病害虫の発生予報と防除上注意すべき事項

病害虫名	発生時期	発生量		防除上注意すべき事項
		現況	予想	
ハマキムシ類 (リンゴコクモンハマキ) (リンゴモンハマキ) (第2世代幼虫)	—	平年並	平年並	防除が必要な園地は少ないと見込まれる。

I なし（日本なし）

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
1. 黒星病	—	平年並（前年並）

(1) 予報の根拠

- ア、向こう1か月の降水量は平年並か多いと予報されている（ /+）。
- イ、7月中旬の巡回調査における果そう葉の発病葉率は0.02%（平年0.15%）で低く、発病果率は0.03%（平年0.23%）でやや低かった（ /-）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、発病部位は速やかに切除し、適切に処分する。
- イ、薬剤の散布は10日間隔で行う。降雨が続くと予想される場合は散布間隔を7日とする。
- ウ、スピードスプレーヤで防除する場合は、1列おきではなく全列を走行し、かつ低速で丁寧に散布する。薬液のかかりにくい部分に対しては当日中に手がけで補正散布する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
2. 黒斑病	—	平年並（前年並）

(1) 予報の根拠

- ア、向こう1か月の降水量は平年並か多いと予報されている（ /+）。
- イ、7月中旬の巡回調査における新梢の発病葉率は0%（平年6.48%）で低かった（ /-）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、県内で栽培されている品種では、南水、八雲で発病が多い。
- イ、徒長枝は早めに剪去し、適切に処分する。
- ウ、薬剤の散布は10日間隔で行う。降雨が続くと予想される場合又は発病の見られる園地では散布間隔を7日とする。
- エ、多発条件下では、ポリオキシシンAL水和剤を主剤に加用するか、ポリキャプタン水和剤を散布する。ただし、耐性菌出現回避のため、ポリオキシシン剤の使用は年間3回以内とする。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	感 染 時 期	感 染 量
3. 輪紋病	—	多い（-）

(1) 予報の根拠

- ア、向こう1か月の降水量は平年並か多いと予報されている（ /+）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、枝幹のいぼ病斑は削り取り、トップジンMペーストを塗布する。ただし、年間使用回数（3回）を遵守する。
- イ、薬剤の散布は10日間隔で行う。降雨が続くと予想される場合は散布間隔を7日とする。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
4. シンクイムシ類 (モモシンクイガ)	—	やや少ない (前年よりやや少ない)

(1) 予報の根拠

ア、7月中旬の巡回調査における被害果率は0% (平年0%) で平年並だった (/±)。

イ、県内4か所の防除適期決定ほにおける6月1半旬～7月4半旬の総誘殺数は、92頭 (平年189頭) で少なかった (/-)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、被害果は摘み取り、6日以上水漬けする。

イ、園地の周辺に放任園や防除不良園がある場合は、発生動向に注意して防除する。

ウ、モスピラン顆粒水溶剤は、長十郎、新高、八雲、愛甘水に対して薬害 (葉裏に黒色斑) を発生させるおそれがあるため、これらの品種にかからないようにする。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
5. ナミハダニ	—	やや少ない (前年よりやや少ない)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温はほぼ平年並と予報されている (/±)。

イ、7月中旬の巡回調査における1葉当たり発生頭数は0頭 (平年0.0頭) でやや少なく、発生地点率は0% (平年15.9%) でやや低かった (/-)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、徒長枝は剪去し、適切に処分する。

イ、発生が多い園地では、ただちに殺ダニ剤を散布する。ただし、コロマイト水和剤は薬害 (黄変落葉) が発生するおそれがあるため高温・乾燥時には使用しない。

ウ、ハダニ類は薬剤抵抗性が発達しやすいため、殺ダニ剤は1薬剤1年1回使用、かつ作用点が同一の剤は年間1回使用として、効力低下を防止する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
6. リンゴハダニ	—	やや少ない (前年並)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温はほぼ平年並と予報されている (/±)。

イ、7月中旬の巡回調査における1葉当たり発生頭数は0頭 (平年0.0頭) でやや少なく、発生地点率は0% (平年3.4%) でやや低かった (/-)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、徒長枝は剪去し、適切に処分する。

イ、発生が多い園地では、ただちに殺ダニ剤を散布する。ただし、コロマイト水和剤は薬害 (黄変落葉) が発生するおそれがあるため高温・乾燥時には使用しない。

ウ、ハダニ類は薬剤抵抗性が発達しやすいため、殺ダニ剤は1薬剤1年1回使用、かつ作用点が同一の剤は年間1回使用として、効力低下を防止する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
7. 果樹カメムシ類 (クキカメムシ、チャバネカメムシ)	—	やや多い (前年より多い)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温はほぼ平年並と予報されている (/±)。

イ、7月中旬の巡回調査における被害果率は0.0% (平年0.0%) で平年並だった (/±)。

ウ、県内4か所の防除適期決定ほにおける7月1～4半月のチャバネアオカメムシフェロモントラップのカメムシ類の総誘殺数は173頭 (平年59頭) で多かった (/+)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、園内への飛来時期は年次変動が大きく、飛来数は地域によって異なるため、飛来状況をよく観察する。新成虫の加害は山間部や林地に隣接する園地が多いため特に注意する。

イ、園内への飛来が見られる場合は、ネオニコチノイド剤、合成ピレスロイド剤のいずれかを散布する。

ウ、アルバリン顆粒水溶剤とスタークル顆粒水溶剤は同一成分の薬剤であるため、総使用回数に注意する。

8. その他病害虫の発生予報と防除対策

病害虫名	発生時期	発生量		防除上注意すべき事項
		現況	予想	
ハマキムシ類 (リンゴコクモンハマキ) (リンゴモンハマキ) (第2世代幼虫)	—	平年並	平年並	防除が必要な園地は少ないと見込まれる。

J ぶどう

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
1. べと病	—	多い (前年より多い)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の降水量は平年並か多いと予報されている (/+)。

イ、7月中旬の巡回調査における発病葉率は0% (平年0%)、発病房率は0% (平年0%) でいずれも平年並だった (/±)。

ウ、横手市予察ほにおける初発は7月21日 (平年7月25日) でやや早かった (/+)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、袋かけ以降に散布する薬剤は、コサイド3000、ホライズンドライフロアブル、ボルドー剤のいずれかとする。ただし、使用する際は収穫予定日を十分に考慮する。

イ、ホライズンドライフロアブルは耐性菌出現回避のため年間1回の使用とし、かつQoI剤との連用は避ける。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
2. 灰色かび病	—	多い（前年並）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の降水量は平年並か多いと予報されている（ /+）。

イ、7月中旬の巡回調査における新梢葉の発病葉率は、キャンベル・アーリーが0.1%（平年0.3%）、巨峰は0.1%（平年0.4%）でいずれもやや低かった。発病果房率は、キャンベル・アーリーが0.4%（平年0.2%）でやや高く、巨峰は0%（平年0.2%）でやや低かった（ /+）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、発病葉や発病果房は摘み取り、適切に処分する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
3. 晩腐病	やや早い（-）	やや多い（前年よりやや多い）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の降水量は平年並か多いと予報されている（ /+）。

イ、ぶどうの成熟期は平年より早いと見込まれる（-/）。

ウ、6月上旬の巡回調査における発病果房率はキャンベル・アーリーが0%（平年0%）、巨峰が0%（平年0.1%）でいずれも平年並だった（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、発病した果粒は摘み取り、適切に処分する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
4. チャノキイロアザミウマ	—	やや少ない（前年並）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温はほぼ平年並と予報されている（ /±）。

イ、7月中旬の巡回調査における被害果房率はキャンベル・アーリーが0%（平年0.0%）、巨峰が0%（平年0%）でいずれも平年並だった（ /±）。

ウ、防除適期決定ほ（2か所）における7月1～4半旬の総誘頭数は4頭（平年29頭）でやや少なかった（ /-）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、例年被害の多い園地では袋かけ後もエクシレルSE、合成ピレスロイド剤のいずれかを散布する。ただし、使用する際は収穫予定日を十分に考慮する。

イ、合成ピレスロイド剤の使用は年間1～2回にとどめる。

IV. 気象予報

令和2年7月23日仙台管区气象台発表 東北地方1か月予報（7月25日～8月24日）

(1) 予想される向こう1か月の天候

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

東北日本海側では、期間のはじめは平年に比べ晴れの日が少ないでしょう。その後は平年と同様に晴れの日が多いでしょう。東北太平洋側では、天気は数日の周期で変わりますが、期間の前半は、平年に比べ晴れの日が少ないでしょう。

向こう1か月の降水量は、平年並または多い確率ともに40%です。日照時間は、東北日本海側で平年並または少ない確率ともに40%、東北太平洋側で少ない確率50%です。

週別の気温は、1週目は、東北日本海側で低い確率50%、東北太平洋側で低い確率60%です。2週目は、平年並の確率50%です。3～4週目は、平年並または高い確率ともに40%です。

(2) 向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率（東北地方日本海側）

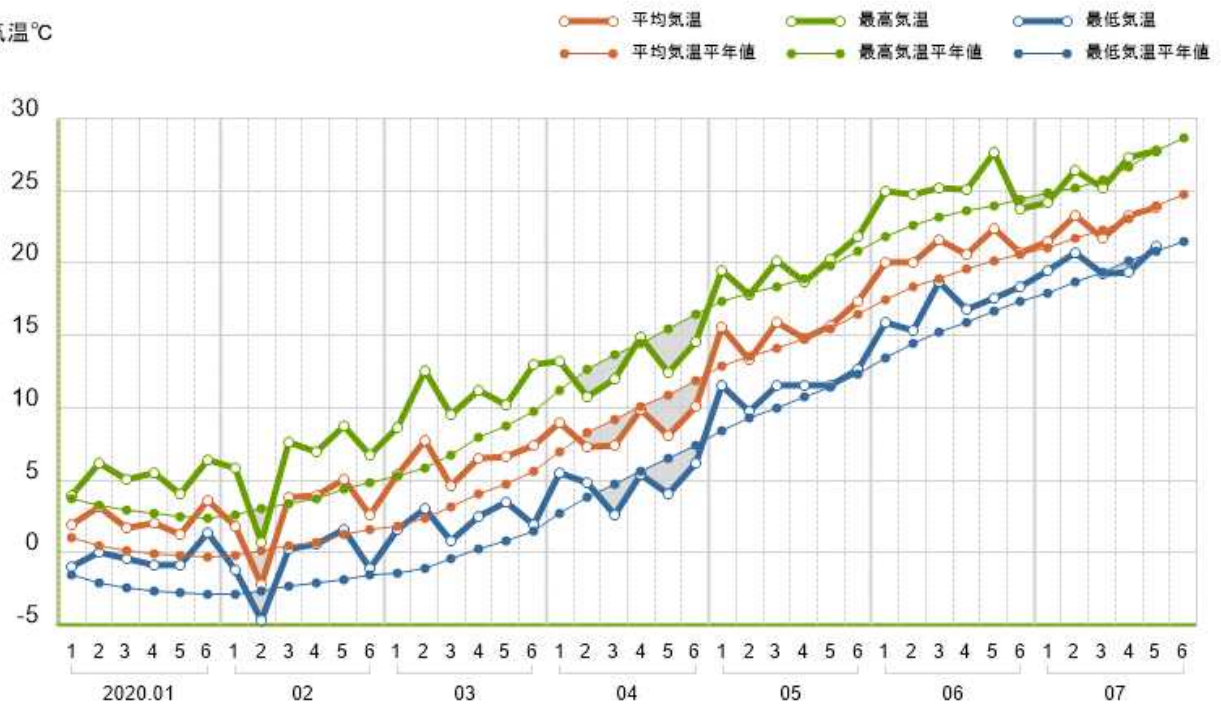
	低い（少ない）	平年並	高い（多い）
気温	30%	40%	30%
降水量	20%	40%	40%
日照時間	40%	40%	20%

(3) 気温経過の各階級の確率

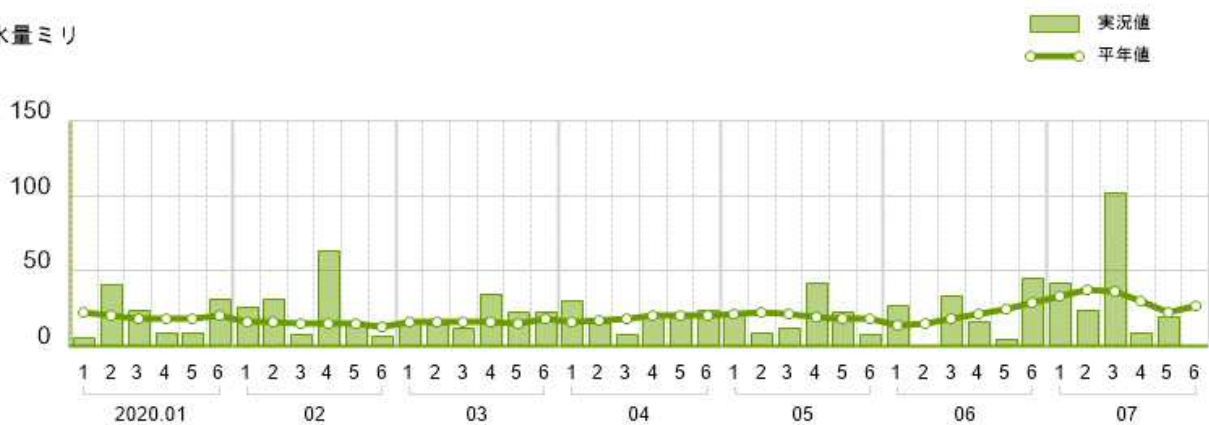
	低い	平年並	高い
7/25～7/31	50%	40%	10%
8/1～8/7	20%	50%	30%
8/8～8/21	20%	40%	40%

V. 気象データ (秋田市、1月1半旬～7月5半旬 秋田県農業気象システムより)

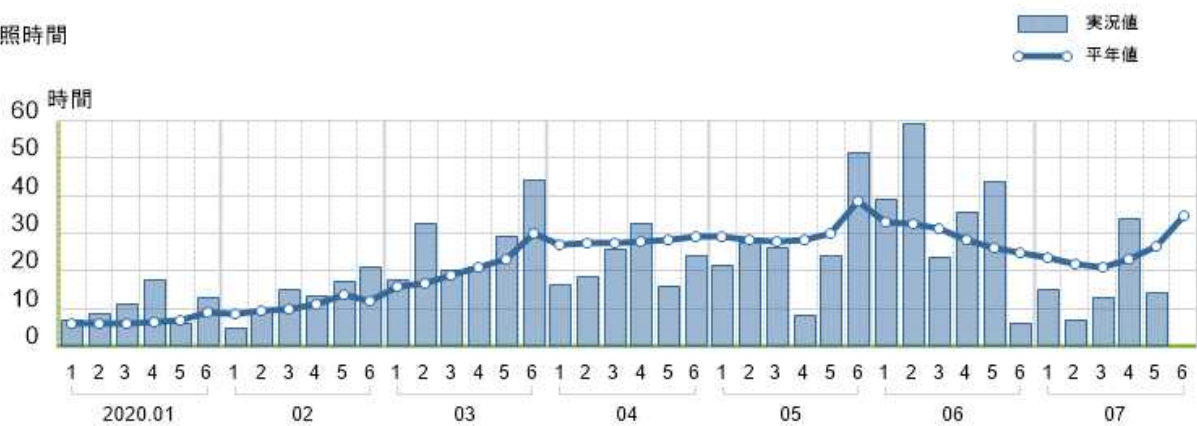
気温℃



降水量ミリ



日照時間



VI. 用語の説明

発生時期

平年の発生日からの差を5段階評価で予測します。

日数	~-6	-5	-4	-3	-2	-1	平年 発生日	+1	+2	+3	+4	+5	+6~
評価	早い	やや早い		平年並				やや遅い		遅い			

発生量

発生密度の平年値からの差を5段階評価で予測します。密度のばらつきの差で示されるので、毎年発生密度が大きく変化する病害虫では、平年値からよほど大きくずれないと「多い」や「少ない」の評価にはなりません。平年値との比較なので、平年値が小さければ、「多い」になっても見かけの密度は多くないことがあります。毎年多発生している場合は「平年並」や「やや少ない」でも見かけ上は多いと感ずることがあります。

	平年値 ↓					
度数	10%	20%	20%	20%	20%	10%
評価	少ない	やや少ない	平年並		やや多い	多い

予報の根拠

予報の根拠に示している（ / ）は予察の要因で、（発生時期/発生量）を表しています。

発生時期が「遅い」場合は「+」、「早い」場合は「-」となります。発生量が「多い」場合は「+」、「少ない」場合は「-」となります。

発生時期、発生量ともに、「平年並」の場合は「±」、関係しないときは「空欄」となります。

気象の確率予報

出現が見込まれる確率予報は、高い（多い）確率が50%以上の場合は「高い（多い）」、低い（少ない）確率が50%以上の場合は「低い（少ない）」となります。低い（少ない）確率が20%で平年並と高い（多い）確率がそれぞれ40%の場合は「平年並か高い（多い）」、高い（多い）と平年並が40%で低い（少ない）が20%の場合は「平年並か低い（少ない）」となります。また、それぞれの確率が30~40%の場合は「ほぼ平年並」となります。

出現確率(低い(少ない):平年並:高い(多い))	解説
高い(多い)確率が50%以上	高い(多い)
(20:40:40)	平年並か高い(多い)
平年並の確率が50%以上	平年並
(40:30:30) (30:40:30) (30:30:40)	ほぼ平年並
(40:40:20)	平年並か低い(少ない)
低い(少ない)確率が50%以上	低い(少ない)

半月のとり方

ここで扱われる「半月」とは暦日半月のことで、毎月1日から5日ごとに区切った期間となります。1半月は1日から5日まで、2半月は6日から10日までであり、以降6半月まで5日ごとに該当する期間を指します。

**令和2年度秋田県農薬危害防止運動
～農薬を安全に正しく使いましょう！～**

令和2年6月1日から8月31日まで「農薬危害防止運動」の実施期間です。
農薬の安全かつ適正な使用及び管理を徹底しましょう。

農薬の適正使用・管理の徹底を！

農薬使用にあたっては、十分注意のうえ、安全かつ適正に使用してください。

○安全使用の基本事項

- ・農薬の使用基準を遵守する。
- ・病虫害の発生状況を把握し、必要最小限の農薬を使用する。
- ・防除履歴を必ず記録する。

○農薬使用上の注意

- ・農薬の散布時には周辺作物に飛散（ドリフト）させない。
- ・家畜・蜜蜂等に影響のある農薬を使用する場合は、地域内の畜産農家及び養蜂業者と緊密に連携し、散布日時や散布地域、使用農薬の種類等を散布前に十分周知する。
- ・農薬散布後は散布器具の洗浄を徹底する。
- ・特に、土壌くん蒸剤は使用上の注意事項を遵守する。
- ・農薬散布時の装備と体調は万全にする。

○農薬の取扱い上の注意

- ・農薬は保管庫に入れ、施錠して保管する。
- ・農薬を他の容器（清涼飲料水の容器等）へ移し替えない。